

巻頭言

最近東南アジアへの出張が増えた。目的は観測装置の設置や打合せなど様々であるが、10年前には殆どが欧米だったのが、今は半分以上がインドネシアやベトナムなど、東南アジアの国々である。世界のどの国であっても、訪れる度に発見と驚きがあり、そして日本のことを振り返るための刺激を与えてくれる。その中で東南アジアの国々の特徴は、何と云ってもそのエネルギー、逞しさである。昔の日本を彷彿させる街の喧噪と人々の活気に元気をもらう。

そうした東南アジアに行くようになって、分かったことが二つある。ひとつは、大学教員や研究者の中には意欲や能力の非常に高い人が多いということである。高い専門性はもちろん、中堅・若手の中には理系の研究者であっても、母国語、英語に加えフランス語、中国語、さらには日本語など、3から5カ国語を使いこなす人も珍しくない。私は知人に恵まれているのかもしれないが、気遣いや謙虚な姿勢も好印象である。

東南アジアで感じるもうひとつの点は、総じて言うならば日本や日本人は非常に歓迎され、期待されているということである。日本と仕事をしたいと思っている個人や組織は少なくない。それは、戦後の経済援助の効果やアジアでの経済発展の成功例という面だけではなく、現地で接してきた日本人が示してきたマインドによる部分が大きいように感じる。つまり相手を尊重し、丁寧に粘り強く築いた関係の賜物である。こうした状況は、恥ずかしながら、自分で足を運ぶようになるまで全く実感していなかった。

しかしかつては日本が憧れNo.1だったある国でも、いまや韓国や中国が人気と聞く。一方、本音では日本とパートナーを組みたいと願っている人は少なくない。残念なことに、いまの多くの日本人の東南アジアに対する意識や姿勢はまだまだ消極的かもしれない。世界経済のエンジンとして発展を続ける東南アジアは、数10年すればどこも日本と変わらない生活を送り、基礎研究でも活躍することになるだろう。その成熟に向かって成長する今こそ、日本が果たせる役割は大きい。

高橋 幸弘(北海道大学)